
Gジェネレーション マーク・ギルダールの旅

幹久疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gジェネレーション マーク・ギルダールの旅

【Nコード】

N9205E

【作者名】

幹久疾風

【あらすじ】

一般にオリジナル部隊と呼ばれる部隊。彼らのストーリーは、ここから始まった。

俺の名はマーク・ギルダ―。今は普通のパイロットだ。昔？昔の事なんざどうでもいいだろ。

「オイ、マーク隊。出撃だ」

この人はゼノ

ン・ティーゲル艦長。俺が今乗っている戦艦の艦長だ。

「了解」

俺と声を合わせて返事をしたのがラナロウ・シエイド。見た目は傭兵だがれっきとしたパイロットだ。

まあ、今はこんなもんだな。

「シエイド遅れるなよ」

「ハイハイ」

今回の機体は俺がフェニックスガンダム。シエイドはトルネードガンダム。というより今はこれしかないので今回もないのだが。

今、俺らがいるのは0079。つまり、ファーストガンダムの一年戦争だ。今回はホワイトベース及び起動したばかりのガンダムの援護だ。

「マーク！敵に赤い彗星のシャアがいる。頼むぞ」

「シエイド。後方援護と戦艦ファルメルの撃沈しろ」

「了解了解」

「敵、ミサイル接近」

「了解、迎撃する」

俺の機体は型としては古いが高性能の機体だ。

サイコミュ兵器を搭載し、自動修復機能ナノスキンを搭載した機体だ。

「ターゲットロック、行けフェザーファンネル」

俺のファンネルは、ほとんど逃れることはできない。ミサイル等の無人機なら尚更だ。

「シエイド！シヨウタイムだ」

「よつしやー、メガ粒子砲発射」

シエイドが乗っているトルネードガンダムはメガ粒子砲を搭載した数少ないガンダムだ。故に入隊したばかりの奴でも操れる。

「とつとつ。エネルギー切れだ。わりい、一旦母艦に戻るわ」

まあ、燃費は悪いが。

「エネルギーが回復したら、敵艦を狙え」

「了解」

「艦長、右の方にいるザク二機、撃破出来ますか？」

「大丈夫だ。ルナ通信士、味方機は？」

「大丈夫です」

「よし、イエーガー操舵士、面舵10射角10だ」

「了解」

今の操舵士と通信士は、ラ・ミラ・ルナ通信士とエルンスト・イエーガー操舵士だ。ルナ通信士は、基本オペレーターだな。イエーガー操舵士は、パイロット兼操舵士だな。まあ、今は人材が少ないから操舵士やつてるんだが。

「副長、いいな」

「OKです」

「よし、メガ粒子砲、撃てえ」

今副長と呼ばれた奴は、本来パイロットとして出撃するはずだった、ニキ・テイラーだ。やはり、こいつも人材不足で副長にまわされたクチだ。

「敵ザク及びムサイ級ファルメルメルの撃墜または撃退の任務を再開する」

「俺はファルメルを落とす。他の雑魚は頼みましたよ、隊長」

全く、やれやれだ。シエイドにはこういう性格だからな、隊長の俺は大変だ。

「こちらマーク隊隊長マーク・ギルダー！敵の撃退に成功。帰還します」

「こちらテイゲル艦長。こちらでも確認した。帰還しろ」
「了解」

やっと一年戦争の一番最初の戦いが終わった。だが、きつくなるのはこれからだ。腕がなる。えーっと、次はホワイトベースを守りながら敵を全滅させるのだが。

「マーク！ 次のミッションはお前が空中に行け。まあ、単独行動になるが大丈夫だろ」

「了解」

いやあ、まさか俺が敵空戦部隊迎撃をするとは思ってもよらなかった。

「テイラー。お前は第一小隊の指揮をとれ」

「了解です」

ニキ・テイラーが指揮をとるなんてな。シェイドも反発するんじゃないかねえかな。

「んじゃ、ニキ隊長。よろしく」

これは意外だったな。

「今回、新しく我が部隊に入隊してくれた、エリス・クロードだ」

「よろしく」

エリス・クロード。確か、資料を見たかぎり、ニコータイプNT値が高いパイロットのはずなんだが。

「エリスは、第一小隊に入る。尚、エリス、テイラーはザニーに乗ってもらおう」

「了解」

説明しよう。ザニーとは、俺達オリジナル部隊の汎用モビルスーツだ。ジムタイプだが、戦闘機を撃ち落とすには最適だ。

「テイラー！ 俺からの頼みだシェイドを援護して、トルネードガンダムのデータを収集してくれ」

「わかりました」

「俺はお前と同期なんだ。敬語はやめてくれ」

「癖です」

ふう、まあいいか。さて、そろそろ出撃だ。

「敵は、確認したかぎり、ザク2、シヤアザク1、あとはマゼラ・アタックとドップが多数だ。気をつけるよマーク」
「分かっている」

さて、最初の相手はドップだ。どうするかな？

「よし、メガビームキャノン、マルチロック」

まあ、これしか手はねえからな。

「中途半端な覚悟は命取りだぜ」

メガビームキャノンを発射したけどなあ、あんま数が減ってねえ。

「ふむ、マジでどうしようかな？」

「マーク！援護してくれ。艦がもたん」

「了解。すぐ向かう」

急がねえとまずいな。

とりあえず地上に降りた。テイラー達が応戦しているがそう長くは保たんか。

「悪いが戦車どもには墜ちてもらおうぜ」

フェザーファンネルでなんとか墜ちるだろ。

「くたばりな」

フェザーファンネルでマゼラアタックを次々と墜とす。が、なにやら分離するのが見えた。

「マーク、あの分離した奴らも叩いてくれ」

「了解した」

とりあえず、分離した戦闘機をビームサーベルで墜としていった。

「ニキ・テイラー！その機体で上空から降りてくるドップを全て墜としてくれ」

「了解」

「クロードとシェイドは、ホワイトベースとキャリーベースを頼む」

「了解」

「マーク、たった今リーダーに反応があった。おそらく戦艦だろう。至急、撃ち落とせ！」

「了解」

おそらく、ガウだろうな。下から行けない分面倒だ。

「面倒だが、仕方がない。墜とすか」

そして、ガウのウィークポイントを狙って、フェザーファンネルを
発射した。ものの数分でガウは墜ちた。とりあえず、これで一旦終
わりだ。

(後書き)

まだまだ、短編として出すつもりです。期待してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9205e/>

Gジェネレーション マーク・ギルダールの旅

2011年1月25日02時39分発行